



「光に照らされて」

神戸国際大学オルガニスト ミアム 伊藤 純子

先日、仕事で米子に行きました。往路の高速バスに揺られながら、色づき始めた木々の彩りをゆっくりと眺める時間を過ごしました。車窓から見える木々と遠くの山々の光景は、大きな変化もなく脈々と続いて、壮大な天然のパノラマに長時間見入っていました。

ちょうどその日は天候が不安定で雲の動きが速かったため、どんよりと曇っていたかと思うと突然太陽の日差しが差し込んで来たりと、目の前の光景は目まぐるしく変化を繰り返していました。

その様子を味わいながらつくづく思ったことは、光の存在の大きさです。同じような紅葉の光景であっても、太陽に照らされているか照らされていないかによって、格段に異なる表情を見せていました。もちろん、照らされていないでもそれはそれで風情と哀愁漂う、幻想的な美しさがありますが、光が差し込んだ瞬間、それは全く別格の種類の美しさに早変わります。

分刻みで光の強弱を体験したので、紅葉は光に照らされてはじめて輝くということ、手に取るように実感しました。光に照らされた瞬間、あたたかな彩りが誕生し、鮮やかなエネルギーを周囲にまき散らします。同じものでも、光に照らされているかどうかで格段の差が生まれるということ、改めて痛感した体験でした。これは紅葉の光景以外にも当てはまることではないかと思います。



私たちは日ごろ、そのときを生きることに精一杯で、自分や物事を俯瞰して眺められなくなる人が多いのではないのでしょうか。そのようなときにも、どのようなときでも、私たちに照らしてくださっている神様の存在があります。

11月末から教会のカレンダーではアドヴェント(Advent)に入ります。クリスマスを迎えるためのシーズンです。キリスト教ではアドヴェントは「光を待ち望む季節」として捉えられています。私たちが照らす存在としてのイエスキリストの到来を待ち望むこの季節、改めて光の存在と有り難さに目と心を向けてみたいと思います。

暗いところにこそ輝いて、暗いところにこそ有り難みとパワーが増す光。いつも光に照らされている存在としての自己を感じると、あたたかな気持ちに包まれます。

一口メモ

アドヴェントの季節にしばしば登場する、「キャンドル」「イルミネーション」「星」などのイメージは、「光を待ち望む」という意識を目に見える形で象徴しているものです。アドヴェントの聖歌にも光というワードが多くみられます。

(例) 聖歌69番「もろびとこぞりて」3節

♪この世の闇路を照らしたもう たえなる光の主は来ませり
♪主は来ませり 主は来ませり 主は来ませり

